

植民地朝鮮における地方青年の教育経験 —1920～30年代農業学校・農業補習学校をめぐって—

小谷 稔

本論文の目的は、1920～30年代植民地朝鮮における地方青年の教育経験について、農業学校と農業補習学校に着目して明らかにすることである。

植民地朝鮮教育史のみならず、近代～解放後の韓国・朝鮮史をめぐっては、ここ30年あまりで経済史を中心とした「植民地収奪論」と「植民地近代化論」との間での議論の応酬、そして「近代」自体を批判あるいは相対化する「植民地近代」論へとパラダイムが変化してきた。その中で植民地教育は様々な語られ方をしてきたが、地方青年・農村青年を主たる対象とした両学校での教育を扱う本論文は、「植民地近代」論に焦点を合わせつつ、教育との関係において①両学校が朝鮮社会にとって持った意味②学校に通う学生・生徒の論理、③フーコー的な「規律権力」との距離について、また学校に通う農村青年が暮らしていた、あるいは卒業後に暮らすことになる農村との関係において、①先行研究でテクノクラート型の対日協力者として議論されている「農村エリート」の実態解明（分節化）、②および彼らが経験した教育過程の分析を主たる問題関心として掲げた。そして、当時教育を受けた「ひとびとの歴史」を意識化するために、「教育経験」という概念を採用した。

従来の教育史研究においては、普通学校中心、および実業教育偏重という植民地教育政策への批判という問題関心から、初等教育（における実業教育）の批判的分析、および初等学校に至らない各種教育施設の民族教育の試み、あるいは「実業教育ではない教育」への志向（高等普通学校や私立学校）の研究が盛んに行われてきた。しかし、初等教育後に受ける実業教育それ自体への研究は立ち遅れてきた感がある。また教育を受けた青年層に関する実証研究も、それほど蓄積されているわけではない。これは当時の朝鮮社会、あるいは植民地的状況から、朝鮮人の中から「青年層」を取り出すことが困難であったことを反映しているけれども、とりわけ30年代以降に植民地社会によって創出されていく「青年像」に比して朝鮮地方青年はいかなる存在であったのか、について考察を深めていく余地があると考えられる。

以上の問題意識と先行研究の検討をもとに、本論文では3つの論点を設定した。一つ目は、呉成哲（2000）や駒込武（2015）が提示した被植民地民が植民地教育に賭けた（賭けざるを得なかった）「夢」と、その「現実」を、両校に沿って叙述することで、両校にいかなる「夢」が賭けられ、またどのような「現実」が待っていたか、そしてその中でまた「夢」が現れたのか…という動態的關係を明らかにすることである。二つ目は、両校に通った農村青年がいかなる人々で、どのような教育を受けていたのかということ明らかにすることである。三つ目は、個々の農村青年にとって、両学校での教育経験はいかなるもので、その中で学生・生徒はいかに立ち振る舞ったのかを明らかにすることである。

具体的に、まず第1章では、当時の法令や統計、学校長会議史料、各種の新聞史料を用いながら、農業学校をめぐる起こった5年制への昇格運動を題材として、朝鮮社会あるいは学生の農業学校認識と植民地権力・学校当局とのせめぎ合いあるいは妥協の過程を検討した。植民地朝鮮では高等普通学校の設立が制限されており、農業学校はその「代替」として高等普通学校と比較される存在であった。そのため、進学・就職機関をより保障してくれる教育機関として5年制農業学校が期待されるようになり、朝鮮人学生や朝鮮社会の働きかけと、そうした機能を認めざるを得ない学校当局の思惑、あるいは戦時体制への移行により徐々に同校の昇格が達成されていったことなどを明らかにした。

第2章では、植民地朝鮮における農業補習学校の展開とその実態を1920年代と30年代の二つの時期に分けて、その地域での展開過程や朝鮮社会・生徒たちの受容のありようを検討した。20年代には産業教育を普及させたい植民地当局と初等後教育を充実させたい朝鮮社会、30年代には農村振興運動に資する中堅人物育成施設の設立と同様に初等後教育を充実、あるいは農業学校に昇格させようとする朝鮮社会（朝鮮人生徒）、あるいは同校を就職機関と見做す農村青年やその家族とのすれ違いを明らかにした。

第3章では、筆者が2022年度に公開を受けた忠清南道・公州公立農業学校（1933年創立）の学籍簿、第4章では、慶尚南道・南海農業実修学校の学籍簿を利用して、両校生徒の実態把握を試みた。その際、先行研究の成果や両章の成果を相互に参照しつつ、同校学生の実態把握を試みた。具体的には、年齢、出身地域、教育歴、「浪人」経験、自宅の職業や経済規模、進路、正保証人と副保証人との関係、学生が学校に持ち込んだ／学校で形成するネットワークの一端などを明らかにした。また戦時期における学校規律の強化（第3章）や、陸軍特別志願兵制度（第4章）の開始の中で学校が認める「真面目」な学生・生徒と、その実態とがねじれていく様を確認した。

第5章では、公州公立農業学校の学生・金氏（舒川郡出身）が4年～5年次にかけて記した日記『生活記録』（1939年）を利用して、戦時期の農村青年が受けた農業学校での教育経験を紐解いた。本論では日記や関連資料を通して金氏の経歴などを明らかにし、彼が受けた1年間の内容やその経験について、金氏の記述からその実態を検討した。具体的には、金氏の農業教育および「皇民化」教育経験や、校内規律への反応、その問い直しの可能性とその否定、1939年の大旱魃の状況、また彼の進路が「郡守」から「大陸軍人」へと変容していく過程などを明らかにした。

第6章では、南海農業実修学校（1年制）の生徒・R氏（X面出身）が記した『実修日誌』（1939～40年）を利用して、第5章と同様に戦時期の農業補習学校における農村青年の教育経験を扱った。具体的にはR氏の経歴などを明らかにするとともに、R氏の農業教育や「皇民化」教育経験、校内規律への反応、大旱魃の状況のありようとともに、R氏が陸軍特別志願兵に「志願」する傍らで教員試験への準備も進めていく様子を明らかにした。

終章では、以上の内容を踏まえて、序章で示した三つの論点に沿って整理・議論すると

ともに、その内容を「植民地近代」論での教育・農村をめぐる議論に投げ返し、今後の課題と展望を提示した。本論文を通して、①既存の植民地教育史、また「植民地近代」論で扱われてきた、「同床異夢」としての植民地教育、あるいは「植民地公共性」の対象としての教育（施設）といった議論の枠組みをより動的な形で捉えることに成功したこと、②朝鮮人の両学校への「包摂」のされ方について、学校で課される規律権力など「近代」を志向する「欲望」だけで論じるのではなく、既存の初等教育研究でも強調されてきた学校の進学・就職機関としての必要性や、近世以来の朝鮮社会におけるネットワークの存在を指摘するとともに、両学校で教育を受けた「農村エリート」の多様性を示唆したこと、③「対日協力」論と関係して、金氏・R氏が経験した戦時兵力動員における「内鮮一体」の表出の対比、および被動員経験をも有する彼ら二人が抱いた諸感情＝「揺らぎ」の同時代的、あるいは現在的な重要性が強調された。